

東京市中の塵芥

高橋迎月

と云ふ程、夥しい數量なのだ。

前々號に掲げられた、四海浪人の市中の共同便所の向を張つて、汚穢いものを並べ立てる了簡でもないが、古中の塵芥が、如何に處分されるかと云ふ事を、仔細に吟味して見ると、總ての人が鳥渡心附かない、一種の社會的趣味を含んで居るから、茲に之を紹介する事とした。

○市中の世帯持三十七萬七千餘から、昨年一ヶ年中に搬出された塵芥の總量は、勿驚五千七百二十七萬一千貫目餘の巨量で、一車七十貫は詰るといふ塵芥運搬車に、ギツシリ積んだ處で、車數が八十一萬八千百六十餘車、一車の長さを七尺と見れば、總長さが四百十八里二十七町餘で、東京から長崎迄、否此距離は三百四十四里に過ぎないから、東京より未だ先の福島の町から東京を通過して長崎の果迄も續く

迄に、總量の一割に當る燃料や古金物は撰出されて居るので、後に残つた總量の二割だけが、全くの棄芥として、請負人の手で、深川平久町の市の焼却場迄搬ばれて、焼棄てられて丁度のだ。
○續いて起る疑問は、其肥料代や燃料代、古鐵物代が如何に處分されるかと云ふ事だが。之は市の方では一向お構ひなしだ。市では一ヶ年九萬五千圓の掃除費を、十五區の土地の廣狭、搬出の難易——山の手の如に坂路の多い所は、下町の平坦な所より困難之は少ない區で一ヶ月一二圓から、多い區で七八十

であるのは云ふ迄もない——戸數の疎密、取扱場の遠近、环を考察せて、日當四十錢宛の人夫、三十二名乃至六十名を雇へるだけの金を各區に分配して、跡は各區の區長が其範圍で請負人を定める事になつて

芥塵の中市京東



居つて、肥料其他は市の方では不間に附してあるのだ。
○尤も古鐘古釘古火箸の如な古鐵物類が、人夫の餘徳である事は公然の秘密となつて居るが、之とて毎

圓と云ふ、太しい差違がある。が、何れにしても之は、各區の區長や、請負人と直接の關係がある各區の衛生係長との間で、如何様にも處分されるのだ。その間には往々醜聞を傳へる事もあるのだが、此

ばかりでなく、山の手の塵芥は下町と比べれば、前に述べた理由で塵芥が多く人夫や請負人の餘徳となる分子が少ないので、下町の人夫に出入りの少ない理由は、獨り之のみではないのだ。



ばかりでなく、山の手の塵芥は下町と比べれば、前に述べた理由で塵芥が多く人夫や請負人の餘徳となる分子が少ないので、下町の人夫に出入りの少ない理由は、獨り之のみではないのだ。

下町は人家が稠密なので廻るのには手間が要らず。坂路がなくて取扱場は近いので、運搬に骨が折れないばかりか、各市場だの料理店飲食店青物商販の、塵芥を出す事の多い商賣が到る所鼻を衝く如にある上に稠密で、塵芥を出す分量が

ばかりでなく、山の手に幾層倍すると云ふ状態なので、塵芥箱は毎時一括で、間断なく人夫に廻つて貰なければ始末に了へぬ其所で愁る方面では、所謂下町氣質を遺憾なく發揮して、權柄づくで取らせると云ふ處使つて、溜らせぬ如に、溜らせぬ如に心懸る。其内でも飲食店向は戸々然らざるなしと云ふ現状だ。

尤も之は公然は禁じられて居るのだが、袖の下と云つた

早い話が、各區一名の人夫請負人は、運搬用の箱場迄の、塵芥運搬の船賃を、請負額の内で負擔しなければならないので、部下の人夫に、市から割當された日當四十錢を、其儘與へる事は出来ぬ。多大の多いのが四谷・牛込・小石川の如な山の手で、芝区邊で二圓五十錢、少いのは神田・日本橋・京橋の如な下町の繁華な場所なのだ。

其で、下町の手當の少ない區は、人夫が永續して掃除の成績も可いが、山の手は手當が多くて出入が激しいと云ふ變調を示して居る。併し之も、少々詮索して見れば、決して理由のない事ではない。一體市の塵芥取扱場は大川筋を第一として、神田川筋古川筋其他各區の各川筋外濠の、舟楫に便なる要所要所に設けられて、日本橋、京橋、神田の五ヶ所、

四谷の三區は區内に一ヶ所の取扱場もない。麹町は一ヶ所の取扱場がないのに、麹町・赤坂、崎町河岸迄、區内の一切の塵芥を搬出さなければならぬ。之が一切掃除人夫の仕事で、一人一日少なくとも、一車七十貫目の塵芥を、二輪半から五輪迄は搬出さなければならない割當になつて居るのだから、山の手の人夫に出入の多いのも無理はないのだ。

加之に、市の方では絶えず掃除巡視を出して、各区の成績を調査して、好成績であれば何年でも放つて置くが、成績不良な區には翌年度から請負人の變換を命じるので、人夫の労力の多い山の手の請負人は、他區よりも比較的の多額な手當を出して居るが、山の手の悪いのは毎時山の手に限つて、練兵場へ棄てたとか、濠へ投込んだ扱と云ふ批難の聲の起るもの、毎時此方面なのだ。それも一つは人夫が骨が折れる

て穿整立ては爲ない。出す方でも、元戸毎に金を拂つた時代に、自家の塵芥は多いからと、特別の心附

けを爲た頃からの因襲で、何とも思つて居ないのだ。

所が、人夫に取つては之が唯一の目的で、請負人の手當や、古鐵物杯に目はくれない。其もさうか、持場に依つては、一人一ヶ月の賃金が數十圓に當つて請負人は其分前を貰ふので、預りと人夫の機嫌を取つて、宛然主従が顛倒した如な状態なものもある位なのだ。

別府の繁昌

四六郎

◎
多趣味な別府の温泉が、何故に東京の人達には多く知られてゐないかと云ふことは、少時おいて、他の地方では殆ど覗知ることの出来ない、別府の木賃

くのである。随つて、最も浴客の少ない時で二千人、多い時では六千近くもあると云ふ事。

◎
別府は千の戸数の中、二百五十の宿屋があると云つたが、而もその九分以上は實に木賃宿である。木賃と云へば誰れしも灯の暗い慘な家を思出す。然し、別府の木賃宿は然うではない。中には實に三層の大建築を有して、三百以上の人は優に泊める事が出来ると云ふ家さへ少くない。

だから、別府の木賃宿には、京阪地方の富豪でも、東京の華族様でも、不自由なく泊めるやうな設備もある。事實泊まつても居る。然しました、貧しい者をも宿すだけの餘裕は幾らもある。二百以上の数の中には、種々な階級のある事は言ふまでもない。また、木賃にも普通の木賃と、間貸をする木賃との二通りがある。間貸の方は概して立派で、一日一圓四十錢二圓位までのものさへある。勿論其れら

宿」を精細に紹介しようと思ふ。

◎
別府の町を見て第一に感ずるのは、別府全體が別府の爲めに作られたのではなくて、温泉の爲めに備へられたものであると云ふことだ。言換へれば、此地に遊ぶ浴客の爲めに設けられたと云ふことにもなる。

全戸數を千と見做して、その中の二百五十は宿屋である。そして、猶他の二百五十は、宿屋によつて營業してゐる。更に其他の二百五十は、俗客の日用品、若しくは「別府土産」として歸郷の際携へかれるもの、其他を商つてゐる。殘餘の二百五十の中、百は女を賣る家であり、他の百五十が、官衙とか、別府の温泉を維持する機關とか、若くは別府全體を保護する機關其他である。だから、全く別府の町の人のみに備へられたものと云つては無く、唯、浴客に供給した餘分のものだけが巧みに縁合はされて行く。

は八疊と六疊位の離れ風などに出来てゐて、一家族が過せるやうにも出来てゐる。そして、木賃である以上、朝晩の味噌汁と香の物、晝の香の物だけは當然宿で馳走する。その他、立派な間借りでもして居れば御飯も炊いてくれ、折々は茶菓もすゝめる。と云ふ具合だから、思つたよりは安いものにつく。

そして、すつと下つてくれば一間五六十錢のものまであつて、其れに夫婦ゐるとか、二三人連れの一團が占めるとか、六疊一室に知合つた夫婦の二三が相談の上同居するとか、種々なものがあらう。但し、間貸は至つて少ない。

◎
別府が最も繁昌するのは、四五六の三月で、つねに五千の浴客を見ない日はない。旅館の混雜、殊に多い木賃宿、其中でも最も多い普通の木賃宿の混雜は殆ど想像意外である。

普通の木賃、つまり間貸でない木賃を指すので、